



学術研究と社会との接点

●
千葉一裕 Kazuhiro CHIBA
東京農工大学 学長



「化学」の役割は、基盤研究から産業応用までその範囲は極めて広い。また、現代の社会は化学なくして成立し得ないことは誰もが認めるところである。そのような中で私自身が大学における研究活動と、社会との繋がりについて視野を広げることができた貴重な経験の1つが、化学反応に関する技術の実用化を目指す大学発ベンチャーの創業であった。ベンチャー企業とは、自身の研究成果の社会実装や技術革新の実践活動の場と捉えられることが多い。しかし実際は、その継続的な成長には研究力や技術開発力だけではなく、生き残りをかけた緊張感を伴う財政戦略、社会との接点構築、未来予測、知財戦略、人脈形成、研究開発環境の整備、活動の持続性の確保、チームとしての力の強化などが必要となる。自分が手がけた技術や研究成果だけに没頭していると、その限界や本質的な問題点に気づかないばかりか、他の優れた方法を見過ごし、結果的には大きなチャンスを失うこともしばしば起こる。また、世の中の動きに敏感であること、時代を先取りする視点も技術を伸ばす上では必須のことである。これらは、こうすればできるという明確な方法があるわけではないが、信頼できる仲間たちといつも忌憚のない意見を交換し、自らの足で情報を収集し、ともに力を合わせて難局を突破していこうとする協力的なチーム作りが非常に重要だと思う。勇気ある決断、人を惹きつける力、説得・交渉・自己制御の力なども欠かすことはできない。

何かを強く進めようとするリーダーには、絶対にそれを捨てないという思いを持ち続ける内面的な力が必要である。単に正論を述べるのではなく、やりたいこと、やるべきことをともにできる環境があってこそ、初めて人はチームとして大きな力を発揮するものだろう。そして同時に各チーム内でその価値観が共有されることが必須である。このような体制作りも含めた実践能力や目標の共有は、研究開発をリードする者として欠かすことはできない。人も組織も、基本的にはそれぞれの目指すものや価値基準が違うことを前提とし、尊重しながらその中で共通して目指せるもの、目標を達成したときに互いに得られるメリットとは何かをしっかりと追求しなければならない。違いがあることを前提とすることが、実は強い一体感と新しい価値を創出する原動力になるのかもしれない。組織間の連携、組織内での部署を越えたチーム作りにはじまり、自らが交渉の場に立って新しいことを始める決意、ベストな人との繋がりを広げていこうとする心構えも大事だ。また同時に、プロジェクトに参画するチームの中から新たなリーダーを継続的に導き出していくことが、目標達成に至るハードルを乗り越えていく重要な活動となる。これらの要素は、大学における教育、研究の質的向上そのものにも必須の重要事項であるとともに、社会実装を踏まえた研究開発の中核をなすものではないかと思っている。

© 2020 The Chemical Society of Japan